

## コリント人への手紙第二 第6章 10節

「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。」

悲しみは時々襲う。今日の一時に襲いかかり、その後にはいつの間にか去ってゆく。ときに、長い期間ここに居座る悲しみもある。しかし、それでもやがて小さくなり去るときが来る。喜びをいつもとある。悲しみより大きい喜びがある。悲しみのなかでさえも喜べる。突然襲う悲しみと異なり、住まいとなる喜びがある。

貧しいとは言わない。貧しいようでも、とある。貧しくない、貧しさで終わらない貧しさである。この貧しさは一人ではなく、多くの人を富ませる貧しさである。富もうとして貧しくなったのではない。貧しくなり富む者とされた者である。神の前で貧しくなった者の富である。

その者は、何も持たないようである。何も持たない者のように見られる。しかし、神の前で貧しくなった者である。すべてをもっている神を知り、信頼している者である。だから、すべてのものを持っている。他者のために与えられていることを知っている。与えられ持っているものを用いるたびに体験する。持っているものが枯れることがないことを。持つものが溢れてくることを。